

子どもの心に沁みる、紡ぎ合う心と心

— 保育者に伝えたいこと —

辻 道代

(幼児教育学科)

要 約

私は、公立幼稚園に38年間勤務してきた。その中で幼児教育は、幼児理解に基づいた環境の中で育つということが分かった。しかし、細かく見ていくと、幼児は一人一人違う、違うからこそ、幼児理解も環境も一人一人違うということが言える。その違いを理解していくためには、子どもと様々な方法で関わることで知ることができる。今回特に注目したことは、子どもとの関わりの中でも特に言葉による関わりである。子どもたちは、自分かけられた言葉で元気になったり、気持ちが安定し、前に一步踏み出せたり、安心感をもったりすると感じた。それは、子どもたちが、心に沁み入る言葉を支えに、心と心を紡ぎ合わせながら「わたし」から「わたしとあなた」、そして「わたしとあなたたち」を実感し、その結果、一人一人が友達っていいな、仲間って素晴らしいという思いが芽生えるということだと考える。

今回この実践を通して、3歳児は保育者が「自己発揮のために支える」という支援を通して、やってみたい心・伝えたい心・支えてほしいと思う心が育っていくのではないかと考えた。4歳児は「揺れる心を抱きしめる」支援を通して伝えたい心・やり遂げたい心・支えたい心が芽生えるのではないかと考えた。5歳児は「響き合う心に寄り添う」支援を通して、分かち合いたい心・やり遂げたい心・創り出したい強い心が育まれるのではないかと考えた。

また、3歳児の事例①は、担任として、その他は園長として、毎月一回の園だよりの中に記載した事例である。保育者に向けて、何が大切なのかも合わせて伝えたいと思う。

キーワード：言葉、幼児理解、紡ぎ合い

1. 3歳児—自己発揮のために支える

事例① 4月 生まれて初めての自己決定

「おかあさんがいい」入園式の次の日からAさんはお母さんから離れませんでした。どこの園でも必ず見られる光景です。それがずっと続いたので、しばらくはお母さんも幼稚園にいてもらうことにしました。「Aちゃん、ほらきれいなジュースができたでしょ。お花さんからこんなにおいしいジュースができるんだよ」「お母さんがいい」「そうかあ、Aちゃんはお母さんが大好きなんだね」遊びに関心を持たせようと様々な遊びを見せていたが、Aさんはお母さんで頭がいっぱい様子。そこで遊びながらお母さんの話題に切り替えました。「お母さんは、おいしいご飯を作ってくれる？」「うんいっぱい」「お母さんは抱っこしてくれる？」「いっぱい」だんだんAさんの目が変わってきました。そして話していくうちに、「イチゴのジュースが好き」と遊びに関心を寄せてきたのです。そういった日が何日も続きました。そして6月の忘れもしない雨の日、いつものようにお母さんに抱かれながら登園してきたA子さんは、自分からお母さんの

腕から降りたのです。Aさんの視線は私です。“先生行くよ”と言っているような目でした。私は座って両手を広げると、Aさんは3歩歩いて私の胸に抱かれました。そして片手で私の洋服を握りしめながら「お母さん、バイバイ、迎えに来てね」と言ったのです。お母さんの目には涙があふれていました。「迎えに来るからね。先生といっぱい遊んでね」と帰っていかれました。その後は大泣きでしたが、周囲の子どもたちも「Aちゃん、おはよう」と声をかけてくれて、Aさんは泣き止みました。

この瞬間は、Aさんにとって人生で初めての自己決定ではないでしょうか。誰に言われたのではなく、自分で決めて自分で実行したのです。その瞬間に立ち会えることが、保育者の醍醐味でしょう。

心に沁みた言葉

「Aちゃんはお母さんが大好きなんだね」

保育者へ……一人一人違って当たり前ということを心に留め、人と違った姿でもその心を受け止めることが、子どもにとっての安心感につながります。

事例② 6月 言葉にならない言葉で

保育室に一人でいたBさん。何して遊ぶのかと思っていたのでしょうか。するとCさんも入ってきてままごとで遊び始めました。BさんはCさんのそばに行ってみていました。お皿が並べられていく様子を見て、1枚ほしくなったのでしょうか。Bさんが手に取るとCさんが、取り返しました。Bさんはびっくりして私の顔を見ました。

「Bちゃんもお皿が欲しかったの？」するとCさんはすぐにBさんに別のお皿を渡していました。

何気ない一コマですが、初めて出会ったまだ見知らぬ2人が同じ場所にいるだけで、こんなにも気持ちが通じ合えたのです。言葉で自分の気持ちを伝えることは大切ですが、自分の気持ちを行動で表現することが、言葉で伝えられるようになるための経験なのだと思います。もちろん傍に大人がいて、気持ちを察し言葉で相手に伝えることで分かったのです。「貸してあげなさい」ではなく、「こういう気持ちなんだね」と伝えるだけで、子どもたちは、次の行動を考えます。今はまだ、うまく人とかわれない3歳児ですが、友達や先生と過ごす中で、多くのことを学んでいきます。そのすべてのことをゆっくりと時間をかけて、大事なことを自分の体験から学んでほしいと思います。

心に沁みた言葉

「Bちゃんもお皿が欲しかったの？」

保育者へ…3歳児は友達が使っていても自分が欲しいと思うと、Cさんのように取ったりしますが、悪意はありません。自分の気持ちに素直に行動したのです。だからお互いの気持ちが分かるのです。保育者は、両者の気持ちに寄り添い、その子の気持ちになって気持ちの橋渡しになるような言葉を考えていきたいものです。

事例③ 7月 友達の気持ちを知る

Dさん、Eさん、Fさんの3人の男児たちが追いかけて合っています。最初は、みんな笑顔でした。しかし、だんだん追いかけているDさんが不快な表情をし始めました。追いかけているEさんは、服をつかんだり離したりしています。そしてついに「やめて！」と大きな声でDさんは言いました。Eさんは「いやだ、もっとやりたい」とグイグイ攻めていきます。Dさんが嫌だと言ったときに、すでに3人の遊びは遊びでなくて気持ちの押し付け合いになっていったように感じられました。私が

「Dさんは嫌だと言っているよ」Eさんは「もっとやる！」Dさんに「何をやめてほしいの？」Dさんは「服をひっぱるから」Eさんは「鬼ごっこ（しているんだよ）」と言いました。「鬼ごっこをしていたんだよね。楽しかったんだよね。でもDさんは服を引っ張られることが嫌なんだって」そう言うとDさんは「鬼ごっこならいいけど」私が「そうかあ。鬼ごっこは服を引っ張らないってことだね」と言う。「分かった」と言って3人はまた、保育室の方に走っていきました。

Eさんには何故Dさんが楽しいはずの鬼ごっこで「やめて」と言ったのか分かりませんでした。ただ、自分が拒否されたことは、言葉の調子から分かってきて、気持ちが揺らぎ、手に力が入り、引っ張るという行動に出てしまいました。

年少組11名の生活が2か月過ぎると、互いの名前も知り、あの子と一緒に遊びたいという気持ちも出てきます。その中でDさんのように嫌なことはちゃんと言葉で伝えることが大切な力です。今はまだ、教師の援助があれば言える子が多いようですが、教師がいなくてもちゃんと自分の気持ちを伝えるようになってほしいと思います。また、この時、EさんはなぜDさんが嫌な気持ちになったのか分かったようです。その後も保育室で、3人は遊んでいました。3歳児なりに、相手が嫌だったという理由を理解し、その行為をやめたことが経験を通して相手の気持ちを知ることができたということだと思います。今後楽しい思いも、ちょっと嫌だなと感じることも増えてきます。そう感じるそのこと自体育ちでもあるのです。自分の様々な気持ちを言葉で伝えることが増えていくように、子どもたちの遊びの中の気持ちや関係を見守り、気持ちをつなげていくようにしていきたいと思っています。

心に沁みた言葉

「鬼ごっこをしていたんだよね。楽しかったんだよね。でもDさんは服を引っ張られることが嫌なんだって」

保育者へ…子どもの複雑な気持ちの揺れは、共に遊ばないと分かりません。見ているだけでは、目で分かる行動だけで判断しがちになり、子どもの気持ちとズレが生じます。ズレが重なると信頼関係も培われていきません。いつも子どもと共に遊び、子どもの心の変化に気が付ける保育者でありたいものです。

事例④ 10月 人の気持ちに気が付いて

子どもたちは、段ボールで作った坂にドングリを転がして遊んでいました。廊下を通りかかった私は、ドングリの多さに感激し、子どもたちの楽しそうな雰囲気につられて遊びに入れてもらいました。快く仲間に入れてもらいしばらく一緒に遊びました。そして、片付けの時、「先生も少しだけドングリがほしくなったなあ」とつぶやくといきなりGさんは「だめ」「そうかあ。それは残念」そうでしょうね。ドングリはいっぱいあっても自分たちのドングリだから特別で、そう簡単にあげられないのだろうなあ。

その日の給食の時間のことです。職員室で食べていた私に、すでに食べ終わったHさんがニコニコしてやってきました。そして小さな可愛らしい両手を差し出し「はい」見ると、その両手にはドングリが一個ちょこんと乗っていました。「これは?」「だって先生欲しいなあって。だからあげるね」「うれしい!でもいいのかな」「いいよ、いっぱいあるから」そう言って足早に去っていきました。すると次はIさんとJさんがやってきました。「先生はい」両手にはやはりドングリがありました。するとまたまたやってきては私に渡してくれます。その中に「だめ」と言ったGさんの姿がありました。「うれしい、Gちゃんもくれるの?」「だめっていったけどね・・・」「**大事な宝物だから。先生も宝物にするね。ありがとう**」と言うと、「ぼくと同じだ(宝物)」とにっこりして駆けていきました。その後、Gさんは、毎日のように私のところにやってきて、宝物が入っている箱をそっと開けてドングリを確認すると、にっこりしてまた、遊びに出かけていきました。

私がドングリを欲しがっていることに気付いた子達が、考えて、私に渡すという行動に移したり、また、友達の様子から何かを感じて真似をしたりしたのでしょう。こんなにも周囲の状況を見ていて、人の気持ちも感じて、それがみんなに伝わっていく様子から、人に、物に、そして人の気持ちに気付きはじめた3歳児なのです。随分大きくなったその心がうれしく思いました。

心に沁みた言葉

「大事な宝物だから。先生も宝物にするね。ありがとう」

保育者へ…子どもの気持ちは、遊びの時間が終わったからといって途切れるものではありません。ずっとつながっているのです。Gさんは私にドングリをあげないと言ったことが心にひっかかっ

ていたのでしょう。私に渡したことですっきりしました。時間の流れと共に子どもの心は変化していきます。幼児理解は、そういった心の変化に気付けるかどうかです。

事例⑤ 2月 友達の行動が切なくて

年少さんの保育室で一緒に遊んだ時のことです。いっぱいある空き箱を莫藪の上に並べて区切りながら「ここは私の部屋ね」とKさん。「じゃ、私はここね」とその隣を同じように区切り座ったLさん。私が「お隣同士だね」と言うと、とても嬉しそうに顔を見合わせていました。ちゃんと友達とかかわりをもって遊んでいる姿に成長を感じました。その楽しい雰囲気から男児たちも入ってきました。それぞれに自分の部屋を空き箱で仕切っていました。そんな中、製作コーナーで一人提灯を作っていたMさん。出来上がるとそれをもって「おばけだぞー」とみんながいる部屋へと向かっていきました。するとKさんは「お化けごっこなんてしていない」するとMさんは悲しくなって大きな声を上げて泣いてしまい、保育室から出ていきました。私は「**Mさんは、お化けごっこがしたかったんだね。みんながお家にいるから丁度(驚かすには)いいと思ったのかもしれないね**」と言うとKさんは「Mちゃん」と大きな声で呼びました。みんなで「Mちゃん」コールが始まりました。Mさんはその大きな呼び声に出ていくことが恥ずかしくなってきたか、なかなか現れませんでした。戸の隙間から提灯を出したので「お化けだ!みんな早く寝て。寝ない子は連れてかれるよ」と私が声をかけると、みんな寝転び一斉にしーんとして静まり返り、その瞬間を見計らってMさんが「おばけだぞー」と入ってきました。そのうち「夜になりました」と誰かが言うとお化けが現れるという遊びになっていき、電気まで消してお家ごっこ+お化けごっこを楽しみました。

泣いて出ていったMさんのことをみんなは確かに気にかけていました。どうすればよいかはまだ分からないのですが、一瞬どうしようという雰囲気が流れたことは確かです。Mさんコールが始まったときはみんな笑顔でした。最初にMちゃんコールをだしたKさんはお手柄です。それにつられたみんなも直感的にこれだ、これならMちゃんは戻ってくるはず、そんな期待感にあふれていました。

4歳児になる前のこの時期、友達の存在が遊びに大きく影響してきます。そしてその友達の行動や言葉に関心を持ち、不都合がおきたら何とかしよう、そんな思いが波のように伝わり行動に移していくことが、クラスとし

ての意識が育っていく過程となるのだと思います。

心に沁みた言葉

「Mさんは、お化けごっこがしたかったんだね。みんながお家にいるから丁度（驚かすには）いいと思ったんかもしれないね」

保育者へ…別の遊びで遊んでいても、近くで繰り広げられている遊びに興味をもった子どもは、どのように仲間に入るかが一つの壁になっているように思います。保育者はその壁にすぐに穴をあけてしまうのではなく、まずは見守り、子どもが考えた穴をあける方法を十分に認めていくことが大切だと思います。

3 歳児—自己発揮のために

○どのように心に沁みた言葉なのか

●その後の子どもの姿

①「Aちゃんはお母さんが大好きなんだね」

○子どもが一番わかってほしい心の言葉。

●母親からの自立の第一歩を踏み出した。

②「Bちゃんもお皿が欲しかったんだね」

○自分の心が分かってもらえた嬉しい言葉。

●相手の気持ちが分かり、自分から行動する。

③「鬼ごっこをしていたんだよね。楽しかったんだよね。」

でもDさんは服を引っ張られることが嫌なんだって」

○何が嫌だったのかを、はっきりとみんなに伝わった言葉。

●相手の気持ちが分かり、遊びのルールが話し合われた。

④「大事な宝物だから。先生も宝物にするね。ありがとう」

○自分の考えた行動を認められた言葉。

●「ありがとう」と言われたことが嬉しくて何度も私と触れ合おうとした。

⑤「Mさんは、お化けごっこがしたかったんだね。みんながお家にいるから丁度（驚かすには）いいと思ったのかもしれないね」

○友達の気持ちを想像し、何とかしたいという気持ちにつながった言葉。

●友達の気持ちが分かり、みんなで仲間に入れようと考え行動に移した。

2. 4 歳児—揺れる心を抱きしめる

事例① 4 月 友達に必要とされて

ちょっと不機嫌そうな面持ちで、職員室に入ってきた

Aさん。「いらっしやい。でもどうしたの？悲しそうだよ」でもAさんは何も言いません。友達と何かあったのか、それともお母さんが恋しくなったのか、「絵本でもいいよ。積み木もあるから職員室で遊んでいいよ」と言うと、少しほっとしたような表情を見せました。しばらくしてから「先生と手をつないで、お部屋に行ってみようか」と言うと、私の手を握って、歩き始めました。保育室に行くと友達のBさんが「Aちゃん、どこにおったの？探していたよ」それを聞いたAさんにはっこりして、友達の中に入っていました。

4 歳は友達との関係が深まりつつあると同時に、自分の思うようにならないことも多くなり、気持ちの調整が自分一人では難しい時があります。そんな時、一人になりたかったり、別の場所で気持ちを立て直そうとしたりします。職員室はそんな場所にできればいいと思っています。「探していたよ」という友達の言葉や気持ちはすごいなあとと思いました。

心に沁みた言葉

「Aちゃん、どこにおったの？探していたよ」

(友達の言葉)

保育者へ…保育者は、子どもが一人にいるからといって、すぐに何とかしようと声をかけるのではなく、何があったのかを子どもの表情や漂ってくる雰囲気から読み取ることが大切です。そして、一人でいたい気持ちを受け止めて、そっと傍にいたことが、子どもが自分から立ち直っていく近道だと思います。この事例では、友達の言葉が心に響きました。最高にいい展開でした。

事例② 6 月 「わたし」と「あなた」でいたいよ

「一緒に遊ばないってば!」「でも一緒に遊びたい」3 人の子どもたちが何やら大きな声でもめていました。どうしたのかと尋ねると、CさんとDさんは一緒に遊ぶ約束をしてごちそう作りを始めた時にEさんがやってきて、「入れて」と言ったようでした。「私だってケーキ作りたい」と言うEさんに、「だったら違う場所でできて」そうまで言われると何が何でも一緒に遊んでやると引けない気持ちがだんだんEさんには湧いてきているようでした。「同じ遊びだから一緒にした方が楽しいじゃないの?」と私が言うと「ダメってば。だってDちゃんと遊ぶ約束したんだから」仲良し友達ができて始めて、気の合っ

た友達との関係が深まってきますが、その中に入りたい子も出てきます。その関係も大切にしながら、他の子の気持ちもどう受けとめていくか、子どもたちにとっても大問題です。大人がそこで、仲よく遊びましょうといったところで、根っこの解決にはなりません。邪魔されたくないという気持ちは、いけない事ではなく、友達作りの上で通るべき気持ちだと思います。だからと言って何もしないのではなく、3人の気持ちを聞くことにしました。誰と遊ぶのかではなく、「**どんなケーキにする？何を材料にしようかねえ**」という私の言葉に、急にCさんは「じゃEちゃんは、チョコレートソースを作るのはどう？」「CちゃんとDちゃんは？」「ケーキを作っているから、そこにかけて」「分かった」3人は同じテーブルにそれぞれに使う道具を用意して動き始めました。先ほどの誰と遊ぶかの問題の直接的解決にはなっていないようですが、3人で遊ぶ気持ちは、役割分担という方法で解決していったようでした。

このように、友だち関係で揺れる4歳児は遊びを通して解決できることも多くあります。「わたしとあなた」から「わたし」と「あなたたち」の入り口とも言えます。

心に沁みた言葉

「**どんなケーキにする？何を材料にしようかねえ**」

保育者へ…形だけの解決は、その後の遊びが萎んでしまいます。誰と遊ぶかーその大問題に保育者は、少し視点を変えて、言葉をかけると意外にその言葉が子どもの気持ちに合うこともあり、解決方法が見えてくるかもしれません。「わたし」から「わたしとあなた」を十分に過ごさせることで、「わたしとあなたたち」に少しずつ変化していきます。

事例③ 7月 自分たちでやる気を起こして

年長さんがお化け屋敷を作っている・・・これは年中さんにとって、興味津々な出来事でした。お化け屋敷の中を存分に楽しんだFさんとGさん。受付にいた年長さんに「お客さんじゃなくて、お化けになりたい」と伝えました。すると年長さんは「お化け屋敷は年長になってからするんだよ。年長が小学校へ行ったら年中が年長。だから楽しみにして」と言われました。この年長さんの発言にも驚きでした。来年は自分たちが小学校ということが分かっている、自分たちも年中の時は年長になったらお化け屋敷ができることを楽しみにしていたことを伝え

たのでした。そういう気持ちが的確な言葉で説明できたことが驚きでした。そしてお化け屋敷を作ることは、いろいろ考えることや、役を決めることがたくさんあって、楽しいけど大変なんだということも伝えていました。それをじっと聞いていたFさんとGさんは「分かった」と言って、去っていきました。

次の日、年中さんの保育室にお化け屋敷ができていました。段ボールに黒い布が掛けてあり、切り抜いた窓のようなどころから、段ボールの外にいる友達を驚かせていました。一方でお化け屋敷の外側に魚が2匹紐につるされてぶら下がっていました。一つの段ボールからお化け屋敷をイメージする子と、水族館をイメージして魚を作る子もいるのだと思いました。一つの素材に対して、一人一人が異なるイメージをもち、働きかけそのイメージが違っても誰もだめとは言わないで、それぞれが楽しめるそんな姿が年中さんなのです。「**楽しいけど、大変かな？**」と私は昨日の年長さんの言葉を言うてみました。するとFさんは「そうそう、先生もそう思う？楽しいけど大変。でも楽しい」「**大変**」を心から楽しんでいるようでした。

心に沁みた言葉

「**楽しいけど、大変かな？**」

保育者へ…何と言われてもやりたいという強い気持ちは、自分達が楽しい経験をしたからです。楽しいことを自分達でも作りたい、そんな思いが、保育室で形となって現れました。そこには、どんなイメージでも参加できる自由空間でした。水族館でもお店屋さんでも、何でもいいのです。遊ぶうちにそれらが合体されて、また新しい遊びが生まれてくる、それが、自由空間で遊ぶ子どもたちのイメージの塊なのです。これはお化け屋敷だから、水族館は別でやろうなどという言葉がけは禁句です。

事例④ 10月 更に意欲が増して

年中さんの保育へ行くと、おいしそうなケーキが並んでいました。秋の実やきれいな紙を使って作ったカップケーキ。どれをとっても一生懸命に考えて作ったことが分かりました。並べられた机の前にHさん、Iさん、Jさんが座っていました。3人でこんなにたくさんのケーキを作ったんだ。すごいなあ。そしてどうやら食べてくれるお客さんを待っているようでした。「ごめんください。ケーキが欲しいのですが」と私が声をかけると待つてま

したとばかり、3人は笑顔になりました。「ただでいいよ」と言うので「えー、ただ？すごい安いね。じゃどれにしようかな」と言ってケーキを選ぼうとしていると、3人は目線をケーキに落としてじっと見えています。きっと自分が作ったケーキを選んでほしいなあと思っているのだと察しました。「一つ目はこれ」と手にとると、Hさんは嬉しそうな表情をしました。これは、Hさんが作ったケーキなんだと思いました。Iさん、Jさんは少し真剣な表情になって目線を落としています。Iさんの目線の先にあるケーキを捉え「じゃ、次はこれ」というとIさんは安堵したような表情です。そして最後はJさんの作ったケーキ。これを外したらJさんは悲しいだろうなあという気持ちで、Jさんの目線を迫りました。しっかり見ながら「**最後はこれ、これも美味しそうだ**」と選ぶとJさんにはっこりしました。私もドキドキしていましたが、3人の笑顔を見ると、ほっとしました。

子どもたちはいろいろなものを作りますが、選ばれることが、認められることだと感じているようでした。3つ売れたので3人は「また、作ろう」と言って動き始めました。嬉しい気持ちが次の遊びや動きにつながります。もの作りが盛んな今の時期、その子の工夫や考えを十分に認め、遊びに対する気持ちを高めていきたいと思いました。

心に沁みた言葉

「**最後は、これ。これも美味しそうだ**」

保育者へ…子どもがお店屋さんを始めた時に、いつも私は緊張感をもちます。それがケーキ屋さんやレストランなどの食べ物屋さんであればあるほど、お客さんになったときに、ドキドキします。それは、子どもたちは自分が作ったものを選んでほしいと思って、見ているからです。その願いを叶えたい、そんな思いでケーキを見つめます。と同時に子どもの目線を追います。自分が作ったケーキを見ているからです。この事例も3人のうち最後に選んだJさんは、人に慣れにくく、この時期になって、やっと友達ができた子でした。尚更選ばないわけにはいきません。皆さんも、自分が好きなケーキを選ぶのではなく、その子がどんな子なのか、どんな思いで作ったのかという、ケーキに秘められた思いを察しながら選んでほしいと思います。その子が次も作ろうという意欲につながっていくからです。

事例⑤ 11月 友達が気になって

先日、達目洞へ遠足に行った時のこと、虫が好きな子が多い年中組の子は、たくさんのバッタやイナゴを捕まえていました。捕まえて牛乳パックで作った虫かごに入れて、のぞき込んでいたKさん。Kさんの虫かごの中には数えきれないほどのイナゴやバッタがいました。Kさんは得意になって「すごい、すごい」と言っていました。そこへ、Lさんが来ました。Lさんも虫が大好きですが、素早く動くバッタに手こずっていて、虫かごの中には2匹しかいませんでした。するとKさんは、Lさんの虫かごを見ながら、黙って自分のかごから1匹のイナゴを取り出すと、Lさんの虫かごに入れました。Lさんは「**ありがとう**」と言いました。LさんはKさんのバッタをもらおうと思っていたわけではありません。思いがけないKさんの行動にうれしさを感じたのでしょう。「ありがとう」が自然に出ていました。私はKさんにせっかく自分で捕まえたものだけどいいの？と聞こうかと思いましたが、Kさんが自分で考えて起こした行動なので私も「ありがとう」とだけ言いました。二人は互いに笑いあいながら、一緒に虫取りを始めました。KさんはLさんに捕るタイミングを実際にやって見せていました。それを真似てLさんは一生けん命に捕っていました。帰りの時、二人の虫かごはいっぱいでした。「こんなにいっぱいになったね」と私が言うのと「うん、Kちゃんのお陰だよ」

Kさんは、Lさんのバッタが少ないことに気が付きました。それだけでもすごいことです。人のことなんて構ってられないほど夢中でみんな捕まえていたのですから。急にバッタを受け取ったLさんはどう思ったのでしょうか。中には、自分でとるからいいと断る子もいます。相手の行動をうれしく感じたLさんは人の気持ちがわかる子だと思います。何よりも、このことで二人の距離が縮まって虫取りがさらに楽しくなったことが一番の収穫でした。

心に沁みた言葉

「**ありがとう**」(友達の言葉)

保育者へ…思いがけず、バッタをもらったことが、二人をつなげました。Kさんも、Lさんも、2人共に心が晴れやかだったことでしょう。自然の中にいることも友達の様子に気が付いた一つの要因だったかもしれません。そして心からの友達の「ありがとう」は保育者の「ありがとう」より、心に響きます。だんだん友達が気になってくる時期でもあります。その時

に、子どもが考えて行った行動について、保育者は言葉を添えたり、表情で嬉しさを現したりすることが、大切な関わりだと思います。

事例⑥ 12月 友達と同じ気持ちで

女兒 3 人でいろいろな道具を探していました。「何をするのかな？」と聞いてみると、「クリーム作りだよ」と忙しく動きながらも教えてくれました。Mさんは、石鹸とおろし器を用意するとすぐに、石鹸を削り始めました。すると Nさんが「Mちゃん、いるもの全部用意してから始めるといいよ」と声をかけています。Mさんは「そうだよね」と言って必要なものを準備していました。「なんで、全部用意するのいいの？」と私が聞くと「だって、いちいち取りにいかなくてもいいからね」「なるほど」必要なものを用意してから始める—これは、今までの遊びからどうすると気持ちよく遊べるかを子どもなりに考えたことなのでしょう。見ているとどんどん物が集まってきます。削った石鹸を入れるボウル、水が入ったペットボトル、かき回すおたま、出来上がったクリームを入れる器、絞り出す道具など、3人はそれぞれに集めてきた道具を見合って、「同じだね。頑張って作ろうね」と顔をにっこりと見合わせ、始めました。「こんなにたくさんの道具がいることが、わかっているんだね。すごいねえ」と言葉をかけましたが、もう夢中になって削っているの、何も答えませんでした。

これだけの道具が遊びに必要なことを頭で考えるのは、遊びの工程もちゃんとわかっているのです。これには驚きましたが、何回も遊びを繰り返していくうちに学んだことなのでしょう。繰り返すということは、遊びが深まり、「思考力の芽生え」につながっていくと思います。

心に沁みた言葉

「同じだね。頑張って作ろうね」（友達の言葉）

保育者へ…ここでは私が少し子どもたちに、話しかけ過ぎたと反省しました。子どもたちは、私が尋ねたことに返してはくれましたが、私の方を見るのではなく、自分の手元をみて、忙しそうに答えていました。最後には、聞いたことに何も答えませんでした。それが夢中になっている姿なのです。それを素早く感じ取り、どうすることがよいのかを考え、見守っていくことも大切だと感じました。しかし、見守るという支援で大切なことは、なんでも見守

ればいいというのではなく、子どもの次の行動を見て、何が育っているのかを探る、あるいは、子ども同士の関わりを見守りながら、その関係性はどうなのかを知るなど、意図をもって見守るということが、保育者自身の資質向上にもつながっていきます。

事例⑦ 1月 友達の思いを知って

最近、元気な男児たちは、プールのところでサッカーをして遊ぶことが好きようです。その日も朝からサッカーをしていました。するとブランコのところで、必死で涙をぬぐっているOさんを見つけました。「どうしたの?」「だってね、Pさんが、もう幼稚園に来なくていいって怒った」「なんでかなあ」と私と一緒に聞きに行きました。サッカーをしていた子たちが集まってきて、その中のQさんが「4人でサッカーしていてPさんが入れてって言ったんだ。そしたらOさんが入れあげないって言ったんだ。だからPさんは怒って、幼稚園に来なくていいって言ったんだよ」とOさんは「入れてあげたかったけど、4人でちょうどなんだ。Pさんが入ったら5人でしょ?」「そういうことだったんだね。2チームだから5人だと人数が一緒にならないってこと?」「そうそう」「だったらそのことをPさんに言ったの?」「言っていない」「Pさんは自分だけ入れてもらえないことが悲しかったんじゃないのかなあ?」と私が言うとOさんは「人数が一緒にならないからダメなんだ」とPさんに言いました。私は「でも、Pさんもサッカーしたいって思っているんだよ。何だか先生はPさんがやりたいのにやれないなんてかわいそうかなあと思うけど」そう言うと集まっていた子どもたち一人一人が何かを考えているようだったので、待ってみました。するとQさんは「あと一人いればいい」と言いました。「いい考えだね」とOさん。「そしたら、先生が入るわ」「一緒にしてくれるの?」「ちょうど先生もサッカーしたいと思っていたんだ」ということで、6人でサッカーをしました。

入れてあげられない理由があり、それが相手にうまく伝わらなくて、互いに嫌な思いをします。少し考えると分かるのですが、今はその少しをどのように導き出していくか、それが壁です。その壁を友達と一緒に乗り切ることが、次の道へとつながっていきます。大人の出番が必要な時です。今を大事にかかわっていきたいと思います。

心に沁みた言葉

「Pさんもサッカーしたいって思っているんだよ。何だか

先生は P さんがやりたいのにやれないなんてかわい
そうかなあと思うけど」

保育者へ… 4 歳児は、まだまだ言葉が足りなくて、互いに嫌な思いをすることがあります。ではどの部分が足りないのか。この事例ではサッカーに入れてあげられない理由が伝えられていないのです。自分の思いの中の結論だけを先に友達に伝えるから、いさかいが起きます。保育者は、両者の思いが言葉で伝え合えるように、時には自分の考えも交えながら支援することが大切です。しかし、押し付けるのではなく、子どもの思いを引き出すための支援であることを心に止め、言葉を選ぶと良いと思います。

事例⑧ 2 月 思いが伝わった

数人の子どもたちが、二手に分かれて、ボールの受け合いをしていました。すると R さんは「ボールが全然とれない。S くんばかり取るんだもん」 T さんも「そうや、みんな順番に受けようと思っているのに、S くんが、前に出るから、みんなが受けられない」すると S さんは「分かった」と言って、R さんにもボールがとれるようにしていました。R さんと S さんと T さんが交互にボールの受け合いを始めました。そのすぐ横で、U さんは何も言わずに様子をみていました。U さんも最初からこの遊びに参加していました。私は、何で U さんのことを誰も気がつかないのだろう、U さんは、普段からあまり自分の気持ちを人前で言えないところがあって、この状況だと益々言えないだろうなと思って、U さんの傍に行き、U さんの背中に手を添えました。U さんが気持ちを話すチャンスだと思いました。U さんは私を見上げると、少し嬉しそうな顔をして、小さい声で「私も」とだけ言いました。しかしみんなは声を出しながら遊んでいるので、その言葉はかき消されたようでした。でも言えたことに嬉しくなって「ちゃんと言えたじゃないの。すごいね」と言葉をかけたあと、「ねえ、U ちゃんの言葉聞こえた？」私の言葉にボールは止まり、そこで初めて気が付いたのか R さんが「はい、U ちゃんいくよ」とボールを投げました。U さんは嬉しそうに受け取ると次の子にボールを投げていました。

自分の思いを言葉で伝えると簡単に言いがちですが、子どもにとって、それはとても勇気のいることです。特に 4 歳児の今、自分の遊びに没頭すると、周囲が見えない

くなったり、隣の子が困っているだろうなと感じても行動に移せなかったりします。それが何かのきっかけで気が付いて、そこから考えを巡らせ、どうしたらよいかを考えていくようです。そのきっかけは近くにいる大人が作っていく関わりが必要だと思います。U さんはその後、聞こえる声で「R ちゃんいくよ」と言葉をかけながら遊んでいました。「私も」の一言がこんなにも U さんの自信となっていくのなら私たち大人は子ども一人一人が今どんな気持ちでいて、そこにどんな言葉をかけていくことが、その子にとって次の一歩を踏み出せるのかということを考えていきたいものです。

心に沁みた言葉

「ちゃんと言えたじゃないの。すごいね。」

保育者へ…保育者が、一人一人今抱えている課題を知ることが、支援の足掛かりとなります。U さんは、あと一歩の勇気があればみんなの前で言えると思っていました。しかし、なかなかその機会がありませんでした。それは、U さんは好きな遊びが見つからず、友達の様子を見ていることが多く、自分の思いをもつという機会も少なかったからです。でもその日はボール遊びに参加していました。この時がチャンスだと感じました。小さい声でも、聞こえない声でも「もっと大きな声でいってごらん」ではなく、言えたことを共に喜び、伝わらなかったことは保育者が仲介していく、最後は言えた自分が誇らしくなるように認めていくことが大切です。

4 歳児—揺れる心を抱きしめる

私の心と向き合って

○どのように心に沁みた言葉なのか

●その後の子どもの姿

①「探していたよ」(友達言葉)

○友達から必要とされていることを知り、心が温くなった言葉。

●友達輪の中に入ることができた。

②「どんなケーキにする？何を材料にしようかねえ」

○問題意識が友達から遊びに移り、頑なな心に穴が開いた言葉。

●遊びのイメージが膨らみ、入れてあげないと思っていた子も仲間になろうと考え直した。

③「楽しいけど、大変かな？」

○自分が考えていたことを、言われたことで、分かってもらえたと安心した言葉。

●大変ということも楽しさに変えて友達と一緒に製作を楽しんだ。

④「最後は、これ。美味しそうだ」

○自分の作ったケーキを選んでくれた嬉しい言葉。

●選んでもらったという嬉しさから更に作る意欲が高まった。

⑤「ありがとう」(友達の言葉)

○自分のしたことが相手に喜んでもらえた言葉。

●その言葉を言った子も、言われた子も、気持ちよくその後二人で教え合って遊びを続けた。

⑥「同じだね。頑張って作ろうね」(友達の言葉)

○友達と同じ気持ちでいるという連帯感を感じる言葉。

●更に気持ちを合わせ、同じ目的に向かって進む。

⑦「Pさんもサッカーしたいと思っているんだよ。何だか先生はPさんがやりたいのにやれないなんてかわいそうかなあと思うけど」

○Pさんの気持ちが分かって、どうするか考えるきっかけとなった言葉。

●人数を合わせるために、みんなが自分たちの問題として一人一人が考え始めた。

⑧「ちゃんと言えたじゃないの。すごいね」

○周囲に聞こえない声だったが、勇気を出して言ったことが認められた言葉。

●一緒に遊べるようになって、更に声が大きくなり、その後の活動に自信がもてた。

3. 響き合う心に寄り添う (5歳児)

事例① 5月 「ありがとう」から「わたしたちへ」

あいにくの雨の日、子どもたちは遊戯室で、大型積み木を使って、箱で作った車の道を作って、走らせたり、段ボールを使って家作りをしたりしていました。車の通る道を坂にしようとAさんは細長い積み木を一人で運ぼうとしていました。それに気がついたBさんは急いでそばに行き手伝っていました。Aさんは「ありがとう」と言っていました。言われたBさんも嬉しそうでした。「ありがとうってなんだか嬉しいよね。すぐに言えるんだ」というと、「年長だからね」と得意そうに答えていました。ありがとうの言葉、なかなかすぐには出ないと思っていたのですが、偶然に聞いたその言葉にひどく感激してし

まいました。そして2人で力を合わせて坂を作っていました。一人で考えた坂でしたが、【ありがとう】の言葉で2人が結びつき、そこに仲間が加わって、坂も長くなりました。言葉を介して一人から仲間へ、そんな遊び方が今後、クラス全体の力となっていくのでしょうか。

心に沁みた言葉

「ありがとう」(友達の言葉)

保育者へ…一人で長い積み木を運んでいたAさんに気付いた私は、手伝おうと思いました。でも、もしかしたらAさんが誰かに手伝ってと言うかもしれない、もしかしたら誰かがAさんに気が付いて手伝うかもしれないと少し待つことにしました。すぐにBさんが手を添えました。私が先に手伝ったらこんな場面は見られなかったでしょう。保育者は“もしかしたら・・・”という気持ちで子どもたちを見守ることが必要な時があります。

事例② 6月 自分たちの考えで

保育室を覗いてみると子どもたちは、色紙でイチゴを作ったり、画用紙でチケットを作ったりしていました。私は「何作っているの？」と尋ねると、口々に「イチゴカフェするんだよ」とのこと。「イチゴカフェ？それは楽しみなねえ。おいしく作ってね」と言う私の言葉も聞こえないようで「お店作ってね」「お客さんにチケット渡してね」「配る人もいるね」あちこちでそんな話が聞けました。年長組全員で取り組む活動として、考えているようでした。「イチゴが嫌いな子がいたらどうする？」「残してもいいことにしようか」「そんな子はきつくないよ」そんな会話が楽しくてみんなが同じ方向を見ていました。「いくついただけるのかな？」と私が聞くと「一個だよ」「えーっ、1個なの？先生は2個欲しいなあ」と言うときCさんは「まだ決めてなかったね」Dさんは「1個に決まっている。だって年少さんも年中さんも食べるんだよ。2個あげたらなくなってしまう」「でも先生は2個欲しいって言っているよ」それを聞いていたEさんたち数人が私に寄ってきて「はあー？1個に決まっているし」「そうや、先生だから2個は何でいいの？」「・・・いや、何個かなと思って・・・」とだけ答えました。

みんなで作ってみようとする姿はまさに年長児の姿でした。そこに加わっていなかった子もいて、出遅れた様子でしたが、それでも後から入ってきて仲間に入りました。

子どもの心に沁みる、紡ぎ合う心と心

イチゴカフェをするという一つの目的に向かって、みんなイメージを膨らませ、言葉で伝え合っている姿は、協同する力へとつながっていきます。自分の居場所を感じ、実現に向けて自分の力を出していくこの活動は、どの子どもも充実感をもってやり遂げてくれると思います。

心に沁みた言葉

「先生だから2個は、何でいいの？」(子どもの言葉)

保育者へ…そうです。先生だからと言って2個はルール違反です。私は、この遊びの一つのルールを確認しようと言ったのですが、子どもたちは、そんなことはもう決まっています。問答無用で、この遊びに対する強い思いや勢いを感じました。保育者は子どもがしている遊びに何か言わないといけないうちがちですが、遊びによってはその必要がない場合もあります。見極めが大切です。

事例③ 7月 一筋の光

遊戯室でお化け屋敷を作っていたFさん、Gさん、Hさん。黒く色を付けた段ボールの板を床に貼り付けていました。なかなか根気のいることです。黒いガムテープを切って丁寧に貼り付けていました。そこへ、見学に来た未就園児の子が、滑り台をしたいと言い始めると、GさんとHさんは、さっと来て、滑り台を上るところを下から支えたり、滑るときに手をもったり、お世話を始めました。「ゆっくりとね」と声をかけ、滑り終わると「できたねえ」と褒めていました。もうこんな言葉もかけられるようになったと嬉しく思っていると、ガムテープをひたすら貼っていたFさんは「もう！私だけやないの。早くこっちに来てやらないの」とGさん、Hさんと呼んでいます。Gさんは「小さい子が困っていたから」Hさんも「少しぐらいいいやないの」と言っています。Fさんは「だって一人じゃ大変なんだよ」Gさんは「だから、やらないって言ってないよ」Fさんは、黙っています。そして「早くやろ」とまた声をかけて3人で始めました。未就園児の子が、今度はお化け屋敷の中のトンネルに入りたいのですが、ちょっと怖くてためらっていたところへ、またGさんHさんは、「一緒に入ってあげるから」と傍に来ました。Fさんは「もう！」と怒っています。すると一緒にいたIさんは「ねえ、Fさん。小さい子がお化けトンネルくぐっていくからそっちらから迎えてあげたら？」という「そうか。トンネルが怖いかどうか試

すってことね」Fさんは、お化け屋敷を作りたい一心で取り組んでいましたが、友達が未就園児の子に関わり始めて怒れてきました。しかしIさんの言葉で自分のしていることと、お世話をするのが、“試す”ことでつながり、納得していました。Iさんの言葉はFさんの考えに一筋の光を与えてくれました。

みんなと同じことに取り組む時、様々な思いが絡み合ううまくいかない時もあります。そんなときは、友達の行動や言葉が支えてくれることがこれからも多々あることでしょう。その経験が、友達と一緒に取り組むことの心地よさや充実感を感じさせていくのだと思います。

心に沁みた言葉

「ねえ、Fさん。小さい子がお化けトンネルくぐっていくからそっちらから迎えてあげたら？」

(友達の言葉)

保育者へ…ここでは、保育者の出番はありませんでした。

一つのこととみんなに向かう時、いろいろな思いで取り組んでいます。いいことばかりではありませんが、そこをどう乗り越えていくのかということを保育者は、子どもの姿から見ている。今、何が育とうとしているのかを捉えて、次の保育に生かすこと、それが役割です。出番はなくても、子どもの話す言葉や、友達がその言葉を受け取る時の気持ちなど、耳を澄まして聞くことが大切です。

事例④ 10月 一人一人の物語

1 学期、虫に興味をもつ子どもたちが増え、その姿から、運動会は「虫たちの大冒険」とし、各クラスで、好きな虫の張りぼてを製作しました。年少さんは、『とんぼのめがね』を親しんで歌っていたのでトンボ、年中さんは、よくお世話や観察をしていたカブトムシ、年長さんは、園庭でバッタを捕まえて遊んだことからバッタと決めて、製作することになりました。年長さんは、どんな材料で作ろうかと話し合ったり、足の部分の工夫をしたり、それぞれができる場所で根気を見せてくれました。クラス全体で一つの物を作ることで、友達と一緒に頑張っているという気持ちが生まれたり、運動会への意識が高まりました。また、ただ虫たちが大冒険をするのではなく、その目的は何かを考えていました。虫の代表作で誰もが親しんでいる『はらぺこあおむし』に注目し、食べ物を探すための大冒険に設定しました。

はらぺこあおむしになって、巧技台を飛び越える、網をくぐる、平均台を渡る、ハードルを飛ぶ、肋木に上り飛び降りるなど様々に体を動かすなど、ほとんどの子どもたちが体を動かすことを楽しんでいました。中には、体を動かすことが、あまり得意ではない子、何となく嫌だなあと思っているJさんに「はらぺこあおむしが、腹ぺこじゃなくなって、蝶々に変身したときの蝶々作りをしようよ」と私が声を掛けました。そうなる気持ちちは変わります。それなら、自分もやってみよう、頑張ってみようという気持ちになりました。意欲を高めるのは、応援、声援、励ましなどいろいろな方法がありますが、気持ちを育てていくためには、そこに楽しい、ワクワクするような目的があると前を向きます。

運動会当日の子どもの姿はどれをとっても素晴らしかったです。走っている時、くぐっている時、渡っている時、そして跳んだときの顔が真剣であったり、笑顔であったりいろいろですが、いろいろだから奥深いのです。例えば、肋木跳びでは、一人一人に喜びや葛藤の物語がありました。最初から問題なく跳べる子もいました。数段上って怖くて挑戦できない子もいました。上までは登れるけど、跳び降りることが怖い子もいました。いろいろな思いをもって向かった肋木跳びです。問題なく跳んでいた子は、いつしか肋木が自分のためではなく、教えたり応援したりしながら、みんなが跳んでほしいという気持ちになりました。「何回も練習すれば、跳べるようになるよ」とKさん。「わかった。」と言って毎日練習したLさん。そのそばにはいつもKさんがいました。一人一人が物語を語り、それがいつしかクラスの物語となりました。素晴らしいことです。

心に沁みた言葉

「何回も練習すれば、跳べるようになるよ」
(友達の言葉)

保育者へ…運動会は、保護者に見せるためにあるのではありません。子どもたちが自ら考え、動き、挑戦し、それが「わたし」から「わたしとあなた」へ、そして「わたしたち」に変わる最高の機会でもあるのです。保育者が指導してできるようになることも子どもにとっては嬉しいことです。しかし、それだけが運動会ではありません。友達同士、励まし合い、共に喜び、共に力を合わせて創り上げるものなのです。そのことを心に留めていただきたい。

事例⑤ 11月 たった一言からの自信

「ドッジしょう」と年長組の3人が勢いよく、園舎の中から出てきました。「線引くぞ」とラインカーを持って引き始めると、途中で石灰がなくなり引けなくなりました。「まあいいか。足でひくわ」と地面に足で引き、ドッジボールを始めました。そのころになると、7~8人となって、勢いよくゲームが始まりました。Mさんは鉄棒のところでその様子を見ていました。私は「Mさんはドッジボールしないの？」と聞くと、「したいけど、もっとしたいことがあるんだ。ぼくはラインカーで線を引いてみたい。いつもNくんが引いているから、いつも引けないんだ」「僕も引きたいと言ったら？」と私が言うと「ドッジボールが強い子が線を引くんだ。僕は弱いから引けない」私はMさんに「ラインカー空っぽになっているから、石灰を入れに行こう」と誘って入れにきました。戻ってくるとNさんは「Mくん、入れてくれてありがとう。僕に貸して」Mさんは何と答えるのか。しばらく見守っていました。すると「僕が引く」とMさんは言いました。Nさんは少し考えていましたが、「いいよ」と言いました。私は「僕が引くって言えたね。言ったらちゃんといいいよって言ってくれるじゃない」Mさんはとてもうれしそうに、とてもしっかりと線を引いていました。

言いたいことがあるけど、今一つ勇気がでなくて、言えなかった一言を、自分の力で言うことができたMさん。その後も石灰がなくなると私を誘って石灰を入れていました。自分で石灰を入れることが、Mさんの背中を押すことになったようでした。その後大きな声を出してドッジボールをしているMさんの姿を見かけます。

誰の力も借りず、自分で言えたことがMさんの、様々な行動に自信を与えています。一つ変わると、他のことにも影響してくることが、総合的に育っていく子どもの姿だと思います。

心に沁みた言葉

「いいよ」(友達の言葉)

保育者へ…言いたくても言えない子は、どこの幼稚園にもいます。だからと言って、いつまでも保育者が代弁しては、育つ機会を失うというものです。なぜ、言えないのか、そのことを見極める必要があります。Mさんは、石灰をラインカーに入れるという行動が、勇気を出すきっかけとなったように感じます。一見すると関係ないようなことでも、結果的に、そのことが

良かったということが多々あります。見極めることは難しいですが、まずは、代弁以外に保育者ができることを探すことが大切です。

事例⑥ 12月 遊びへの熱い思い

年長さんは、今多くの子がドッジボールに夢中です。保育者がいなくても自分たちから始めていく姿も見られます。Oさんに「先生も入る？」と誘われたので、「いいよ。こっちのチームでいい？」聞いていると、Pさんが走ってきて「園長先生も入るの？」と言います。そしてOさんに何やら耳打ちをしました。Oさんは「そうか」と言って、困った様子で私の方を見ました。私は全体の様子からその理由が何か分かりましたが、しばらくどう言ってくるのかなあと待っていると、Pさんが「先生、最初から人数決めてやっているんだから、入れないけど」と申し訳なさそうに言うので「分かったよ。最初から入るのはいいんだね？じゃ次の時に入るから、今は応援するね」と言うと「次は入っていいからね」と答えていました。でもOさんは私を誘ったのに、入れなかったことを気にしている様子だったので、**「誘ってくれてありがとう。先生の気持ちを気にかけてくれているんだね。その気持ちがうれしいよ。次は入るから大丈夫」**と言うと、やっと笑ってくれました。

同じ人数でドッジボールを始めていることや、途中からは入れないことなど、だんだんルールが決められていく様子に、子どもたちのドッジボールに対する熱い思いが伝わってきて嬉しい気持ちでした。好きな遊びだからこそ、みんなで考えてもっと面白くしようと話し合う声が聞こえてきそうでした。

この時期、5歳児はこのように集団でドッジボールや鬼ごっこなどルールのある遊びを繰り返し遊ぶようになります。また、目的をもった一つの活動やごっこ遊びに、まとまりをもって取り組めるようにもなってきます。もめごとが起きたり困ったりする場面では、話し合って自分たちで納得がいく遊び方やルールを決めるなど、みんなで解決していこうとするようになります。そうした中で、自分の考えが受け入れられたり、時には拒否されたりすることもあります。友達とのいざこざが起きたり、葛藤したりすることもあります。負の経験のようですが、子どもたちが成長（互いに受け入れたり伝え合ったりする、きまりやルールを守ったり、友達と作り変えたりする、折り合いをつけたり、共感したりする、協同的な遊びをするなど）していくためには、どれも大切な経験で

す。こうした場面では、十分に時間を取り、保育者が一人一人の思いを受け止めながら見守っていったり、一緒に考える仲間になったりしていきたいと考えています。

心に沁みた言葉

「誘ってくれてありがとう。先生のことを気にかけてくれているんだね。その気持ちがうれしいよ。次は入るから大丈夫」

保育者へ…私をドッジボールに誘っておきながら入れなかった私の心を思いやり、暗い表情のOさんに、どんな言葉をかけるとOさんは心が晴れるのか。今この瞬間に言葉をかけることが大事だと考え、ありったけの私の気持ちを言葉にしました。笑ってくれたことでほっと一安心。保育者は、この瞬間を逃さないという思いで、子どもと関わるのが、子どもの心に響くのではないかと思います。

事例⑦ 1月 自己肯定感の芽生え

会議室に用事があり、私は、年長組の廊下を通りかかりました。けん玉、紐駒回し、まりつきなど、多くの子どもたちが所狭しと取り組んでいました。みんな笑顔で、成功しなくても何回でも挑戦していました。その中で悲しそうな表情をしているQさん。隣ではRさんが得意そうに紐駒回しをしていました。自分はできないから、どうしよう、やってみたくいけどでも・・・と思っているのでしょうか。気になりましたが、急ぎの用事があり、その場を離れ、会議室へ向かいました。用事をさっと済ませ、Qさんを探すと、にこやかな笑顔でまりつきをしていました。「1, 2, 3, 4,・・・」うまくついていました。

「上手につけるね」と声をかけると、見ててねと言わんばかりに、私の前で、最初からつき始めました。その顔は真剣そのもので、つき終わると笑顔を私に向けました。「すごいねえ。練習したの?」「毎日したんだよ」と答えました。Rさんも「Qさんは、いつもやっていたからね。すごいよね」それから2、3日経ってQさんは自信がなかった紐駒回しに挑戦していました。紐をうまくかけられなくて苦戦していましたが、その顔は以前ように悲し気ではなく、真剣そのものでした。

できないことをあきらめずに挑戦してほしいと願いますが、その根底は、子どもの意欲です。意欲はどこから来るのでしょうか。Qさんのように、できることもあって、できないこともあるその中で、できることは、自分があ

きらめずに頑張ったからという経験をしていくうちに、自己肯定感が芽生えてきます。その気持ちが次の挑戦、意欲につながるのです。言われたからするのではなく、自分から、よし！と思ったときに、諦めない気持ちは育っていくのだと思います。よし！と思えたきっかけは、Rさんの友達を認める言葉にもありました。そして大人は頑張れではなく、頑張ってるねという言葉が、子どもの意欲を掻き立てます。できなくても挑戦している姿、自分だけできないと折れそうな時こそ、「いい、いい、それでいい。ちゃんと挑戦しているそのことが素晴らしい」と個々の素晴らしいさを認めていく言葉をかけていきたいと思いました。

心に沁みた言葉

「Qさんは、いつもやっていたからね。すごいよね」
(友達の言葉)

保育者へ…子どもは、できたことを褒められることは、嬉しいと思います。しかし、頑張っているのにできない子は褒められないのでしょうか。以前にこんなことがありました。縄跳びを100回以上跳んだ子に私が「すごいねえ。いっぱい跳べるようになったね」と声をかけた時のこと。隣でまだ、跳べなくて練習していた子が急に泣き出しました。私はしまったと思ったのですが、「練習してもできない」と悲しむ子に心が痛み「ごめんね。先生、気が付いてあげられなくて。でも挑戦していることが一番大事だといつも思っているんだよ。」保育者は、跳べなくても頑張っているその姿を先に認め、そして、次に跳べる子を認めていく関わりが、みんなを大事にしていくことなのだと思います。細かいことですが、子どもの気持ちになって言葉を掛けていくことが大事なことです。

事例⑧ 2月 友達の言葉がうれしくて

天気の良い給食後の時間、多くの子どもたちが2階から駆け下りてきました。「誰がやる？」「やりたい子が集まってくるからみんなでやれるって」そんな会話をしながら勢いは止まりません。すでに遊びが決まっていたそれをみんなでしようと言う気持ちがあり、その気持ちを確かめるように言葉を交わし合っていました。「何するの？」私はその勢いに職員室から出てきて、尋ねました。「ドッジボール鬼ごっこ」「これが楽しいんだなあ」と言っ

て、まるですでに遊んでいるかのような顔付きでした。「鬼決めよう。」という7、8人の子も達が頭を寄せ合っています。その中でSさんは「今日は何か、鬼やりたくない気持ちだなあ」と言いました。しかし誰も聞いていなかったのか何も言いませんでした。鬼決めが始まりました。残念ながらSさんが鬼になってしまったので、私が「鬼はやりたくないって言ったら？」と言うと「みんなで決めたからなあ・・・」と何度も帽子をかぶり直していました。そうしながら心を整えていたのでしょう。「やっぱり言ってみたら」「・・・大丈夫。僕は強いから。すぐ当てるから大丈夫」と自分に言い聞かせるようにしてボールを手に取り、勢いよく走っていきました。しばらく様子を見てみると、Sさんのボールはなかなか友達に当たりません。願うように見ていると、TさんがSさんに走り寄っていました。「鬼変わるわ。やりたくないんだろ？」と言っています。Sさんは「いいわ。まだできるで。だんだん楽しくなったし」そう言ってTさんを見て笑っていました。私はTさんに「Sさんが鬼やりたくないことを知っていたの？」「うん。鬼決めのときに言っていたから」「それで代わろうと思ったんだね。Sさんの気持ちを考えて、代わってあげるって言えたことはすごいなあと思ったよ」と言うTさんは笑顔で走っていきました。

Sさんの鬼はやりたくないという言葉は、誰も聞いてなかったのかと思っていましたが、ちゃんと聞いていたのです。Tさんは、遊びながらもSさんの様子を伺っていたのだと思います。そしていろいろ考えて迷ってまた考えた結果「鬼代わるよ」と言ったのです。そういった仲間関係が培われていることがこのクラスとして、今までの育ちの結果だと思います。そんな場面はたくさんあると思います。共に遊ぶことで、子ども自ら考えてとった行動を見逃さず、認めていきたいと思いました。

心に沁みた言葉

「鬼変わるわ。やりたくないんだろ？」(友達の言葉)

保育者へ…Sさんが鬼をやりたくない理由は、朝からの様子で何となくわかりました。その日初めて預かり保育に参加することになったSさんは、母親に「行きたくない(預かりに)」と言っていた場面を見かけました。きっとその思いを引きずっていたのでしょう。そんな思いでいるSさんを想い、みんなに言うことを提案したのですが、Sさんはノーでした。鬼はじゃ

んけんで決めることや、タッチされたら交代というルールがあって守って遊ぶことの楽しさも知っているSさんです。自分の気持ちの沈みでみんなに言うわけにはいう訳にはいかないというプライドでしょうか。私はそれを尊重しました。このようにむやみやたらに、代弁することがいいとは限りません。もしこの時に、私が代弁したら、Sさんはより悲しむことになったと思います。しかし、友達のTさんが自分の気持ちを分かってくれたと知った時に、Sさんは吹っ切れたように感じました。子どもの心を知ることは難しいですが、その場の空気を感じることはできます。そんな保育者になってほしいと思います。

5 歳児—響き合う心に寄り添って

○どのように心に沁みた言葉なのか

●その後の子どもの姿

①「ありがとう」(友達の言葉)

○自分で考えた行動が、友達にとって嬉しかったことだと分かった言葉。

●2人の関係が深まった。

②「先生だからって2個はなんでいいの？」

○自分たちの考えをしっかりともっていると感心した言葉。

●自分の思いと友達の思いが同じと分かって、同じ目的が確認された。

③「ねえ、Fさん、小さい子がトンネルくぐっていくから、そっちから迎えてあげたら？」

○友達の考えが、自分の思いとつながって、新しい考えにワクワクした言葉。

●途中、お互いの思いが食い違ったが、再び同じ方向を見て取り組むことができた。

④「何回も練習すれば跳べるようになるよ」

(友達の言葉)

○心がくじけそうになった時、再び勇気が湧いた言葉。

●跳べるようになるまで、傍にいて、コツなどを伝えて跳べた時は、お互いに喜び合い、気持ちが伝わり、その後の活動でも力を合わせるようになった。

⑤「いいよ」(友達の言葉)

○強いと思っていた子が、優しい面もあることがわかり、見方が変わった言葉。

●自分に自信が持てて、次からの活動に勢いが出てきた。

⑥「誘ってくれてありがとう。先生のことを気にかけてくれているんだね。その気持ちが嬉しいよ。次は入るから大丈夫」

○自分が気にかかっていたことを先生も分かってくれていたという安堵を感じた言葉。

●安心して、ドッジボールを始めた。しかし、次のゲームが始まる時は、いち早く私を誘い、共に遊ぶことができたことを喜んだ。

⑦「Qさんは、いつもやっていたからね。すごいよね」

(友達の言葉)

○まりつきの頑張りを認められて、嬉しかった言葉。

●できなかった紐駒回しにも挑戦し始めた。

⑧「鬼変わるわ。やりたくないんだろ？」

(友達の言葉)

○自分の気持ちを知ってくれたという嬉しい言葉。

●その言葉で、やりたくなかった気持ちがふっきて、遊びに夢中になった。

4. 省察

3歳児、4歳児、5歳児の事例から、「子どもの心に沁みる言葉」を考えてみた。

その結果

①3歳児は

・3歳児の心に沁みる言葉とは、子どもが発した言葉を保育者が繰り返すことで、嬉しい、ああよかった、先生ありがとうと思えるのだと感じた。それが子どもにとって、自分を分かってくれたと感じるのではないかな。そこから生まれる安心感を支えに、子どもたちは自信をもって次の行動を起こしていく。それが心を支えるということだと思った。

・事例は、保育者と子どもの心の交流が中心となっている。これは、幼児理解の上で、保育者との信頼関係を培うためには欠かせない関わりと言える。そして、その後の姿からも、自分で、自分が、自分はどういうように、自分がどうするのか、どうしたらよいのかを考え行動する自己発揮につながっていく。心を受け止めてもらえたことで、気持ちにゆとりが生まれ、穏やかになった時に、自己発揮ができるのではないかな。

・月日が経つにつれて少しずつ、友達へ気持ちが移行し始めていることが分かる。友達の言葉が嬉しかったり、悲しかったのに、友達がいたから立ち直ったりする姿も見られる。確実に「わたし」から「わたしとあとな」の関係が生まれている。

② 4 歳児は

- ・ 4 歳児の心に沁みる言葉とは、自分が悩んだり、迷ったりしたときに、保育者や友達が放った言葉で、閉ざされた心に穴が開き、風通しがよくなる言葉ではないか。風通しがよくなると、今までの自分を振り返り、友達はどう思ったのだろうなど、周囲の景色が見えてくるのではないかな。
- ・ 友達との関係ができつつある前半は、気持ちのすれ違いが多く、葛藤する心が見られる。その時は、保育者がある揺れる思いを受け止めて、寄り添うが、それだけでは心が満たされない。そこでまた、葛藤を繰り返す。答えを見つけるのは自分自身であり、保育者は、それを支えることしかできない。しかしそのことが大切な支援であり、見つけるまで支え続けることが役割と言える。
- ・ 「わたしとあなた」が壊れ、時には「わたし」に戻るが、行きつ戻りつしながら、やはり「わたしとあなた」がいいと心から思えるようになる育ちが 4 歳児なのだろう。しかし、個人差はあるので 4 歳児が必ずしも全員がそうではない、辿る道はみんな違うので、一人一人が今、どんな気持ちで、何に揺れているのかを見極めることが大切だと感じる。

③ 5 歳児は

- ・ ほとんどの事例で言えることは、心に沁みた言葉とは保育者ではなく友達からの言葉だった。そこでは自分の思いを相手に伝えあうという対話が生まれている。その対話から、みんなで取り組もうとする協調性、思考力、心が折れそうになっても立て直していく力、全身を思いっきり動かそうとする力など、目に見えない力が育まれている。その力は、人としてこれからの人生を生きていくために必要な素晴らしい力を、全身で吸収している。だからこそ、私たち保育者は、一人一人のペースで主体性が発揮できるように、先を急がせず、ゆっくりと見守る関わりが大切である。
- ・ 5 歳児として目立つのは、もめごとの内容が、複雑に絡み合っていることである。子どもたちは解決ではなく、困っている子の心に寄り添い、自分の心を揺らしながら、その出来事に向き合っている。互いの心と言葉が相互に絡み合い紡ぎ合っていく。そしてその先にある、分かってもらえるという安心感や、その中に先生もいるということが、幼稚園での温かい暮らしとなっていくように感じる。

5. おわりに

給食の時、年長の保育室を覗いてみると、配膳中で、ほとんどの子どもたちが、きちんと座って待っていました。その中で A さんは、椅子を持ち、困った顔で席を探している様子でした。すると B さんは、机に座っている人数を小さな声で数え始めたのです。1 つの机に 5 人ずつ座ることがクラスの決まりとなっています。B さんのその様子に気が付いたのでしょうか。C さんも一緒に探し始めていました。そして二人で「あっ、ここでもいいやん」と自分たちが座っている机も 4 人だということに気が付いて 2 人で「A さーん、ここにおいでよ」と A さん呼びました。A さんは声のする方をみて、安堵した様子で少し笑いながら、その席に座りました。私は数分の間に起きたこの出来事に感動して「すごいねえ。A さんは何も言っていないのに、B さんは A さんが困っていると思ったのでしょ。C さんは、B さんが何も言っていないのに A さんの席を探していると思ったのでしょ。言葉がなくても分かるなんて本当にすごいねえ」「だって友達だからね」私たち大人は自分の気持ちを言葉で伝えることを支援しています。しかし、目の前で起きた出来事は、言葉でなく、子どもの心たちが、まるで空気の流れに乗って伝え合っている様でした。そしてその心は、子どもたちに行動を起こさせました。なんて素敵な心たちでしょう。

保育者へ…子どもたちは、その素敵な心を胸にこれから長い自分の人生を生き抜いていきます。いろいろな困難に出会った時、その心がざわつき、思い悩み、人を思いやり、自分で考えて行動していく一大切な心を学ぶ場として、幼稚園が存在するのであれば、保育者は全力で子どもの心に寄り添い、子どもの心を感じ心と心を紡ぎ合わせながら、一人一人が充実感や満足感が感じられる暮らしを創っていくことが使命であると感じます。

Weaving and Spinning and
Dyeing the Hearts of Children
— A Message to Childcare Staff —

TSUJI Michiyo